

高等学校における 教科指導充実のために 【国語科編】

栃木県総合教育センター 平成28年3月

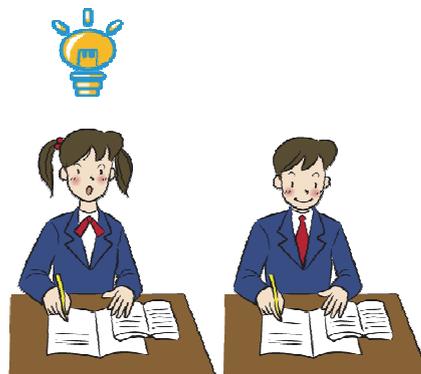
変化の激しいこれからの社会を生き抜く人を育てるために、いま「思考力」の育成がますます重視されています。本パンフレットでは、これからの「思考力」を育むことを目指した高等学校における教科指導の在り方について紹介しています。

これから必要とされるのは「思考力」

平成19年の学校教育法改正によって、いわゆる学力の三要素が明確に示されました。それを受けて、現行の学習指導要領においても「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない」と定められています。このように習得と活用のバランスが重視されているところですが、高等学校においては授業及び学習評価が知識偏重型になりやすい傾向にあり、思考力等の育成に依然として課題が見られます。

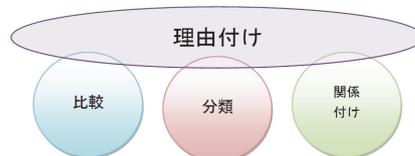
加えて、現代社会は急速な少子化・高齢化の進行による生産年齢人口の減少やグローバル化の影響等によって、日々激しく変化し、先を予測するのが困難になったり個人の力では解決できないような複雑化・多様化した問題に直面したりする場面が増えつつあります。そのような中で、いま教育の果たすべき役割にも変化が求められています。国では「育成すべき資質・能力を踏まえた教育の在り方」が検討されており、「何を学ぶか」だけでなく、「どのように学ぶか」「どのような力が身に付いたか」などの視点が重視されています。

これらのことを踏まえ、本調査研究では、これからさらに重要視されるであろう「思考力」の育成を、高等学校における教科指導の中でどう進めればよいのかをテーマに研究しました。



思考力を育むための「思考のすべ」

当センターでは、平成26・27年度に「思考力・判断力・表現力の育成に関する調査研究」を行いました。その中で、子どもたちが思考をするための技法として「比較」「分類」「関係付け」「理由付け」の四つを提案し、これらを「思考のすべ」と呼ぶことにしました。本調査研究においても、これを取り入れて思考力を育成する事例をいくつか紹介しています。「思考のすべ」についての詳細は、当センターのWebサイトを御覧ください。



栃木県総合教育センター「思考力・判断力・表現力の育成に関する調査研究(小・中・高)」
http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/cyosa/cyosakenkyu/shikouryoku_h26/index.html

事例1 『高瀬舟』を教材としたアクティブ・ラーニング型の授業例 ～思考ツールを用いた授業展開～

事例の概要(3年生を対象に実施)

◇ 教材 小説『高瀬舟』（現代文A）

◇ 単元の目標

- ・文章に表れたものの見方、感じ方、考え方を読み取り、人間、社会、自然などについて考察しようとする。
(関心・意欲・態度)
- ・文章に表れたものの見方、感じ方、考え方を読み取り、人間、社会、自然などについて考察する。
(読む能力)

◇ 取り入れる言語活動

読みの交流を行うことを通して、自身の考えを形成し、表現する。

思考力を育成するための工夫

事例1では、思考力を育成するための工夫として、生徒がものの見方、感じ方、考え方を広げていける学習場面を設定した。

具体的には、第3次で、読みの交流を通して自身の見方を広げ、多様な見方があることを踏まえた上で、自分の考えを形成することを求めた。交流を通して自身の見方を広げさせていくために、グループごとに行う生徒同士の話し合いを絡ませる仕掛けとして、また、生徒の思考を促す仕掛けとして、KJ法(注1)やフィッシュボーン法(注2)といった思考ツールを用いて互いの考えを整理する学習を取り入れている。

(注1) KJ法

事象を分類・分析する手法。問題を見つけ出すときや、問題解決ステップで出された解決策の因果関係を理解し合うのに有効。

【KJ法の実施例】

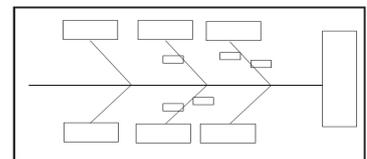
- ①アイデアを付箋等に記入する。
- ②付箋等を見て、共通するものをまとめ、簡潔な文言でタイトルをつける。
- ③小グループを大グループにまとめたり、グループごとの関連を矢印で結んだりして構造化する。

(注2) フィッシュボーン法

事象を分類・分析する手法。問題の要因を探るのに有効。

【フィッシュボーン法の実施例】

- ①大骨の部分が書かれた模造紙を用意する。
- ②問題を分かりやすい文章で表現し、大骨の先に書く。
- ③ブレインストーミング等で問題の要因を挙げていき、それを中骨、小骨のどこに位置付けるかを検討する。
- ④似た内容をまとめ、簡潔に言い表したタイトルを中骨の先に記入する。
- ⑤不要なものは捨てたり、足りないものを足したりしながら図を完成していく。



フィッシュボーン法で用いる図の例

授業の様子

【第1次】話の大まかな内容をつかむ。(第1時)

教師が全文を朗読し、話の大まかな内容を確認させた。

【第2次】本文の内容及び語句の意味を確認する。(第2時～第4時)

読解のポイントを、(1)護送される喜助の様子を把握する、(2)喜助の話聞いた庄兵衛の心の動きをまとめる、(3)喜助が弟を殺した理由を把握する、の3点に絞り、本文の読み取りを行った。

喜助が弟を殺した理由を把握する学習場面では、(1)喜助が弟を殺した理由を付箋に書き出させる、(2)グループになり、自分が付箋に書いた内容をグループの仲間に説明する、(3)それぞれが書いた付箋の内容について互いに質問し合う、(4)各自から出された付箋をKJ法で分類・整理する、という手順で学習を進めた。

生徒は付箋をKJ法で分類・整理するという活動を既に経験しているため、付箋を書く活動も、付箋を内容ごとに分類してタイトルをつける活動もスムーズに進んだ。3ページの図1は、喜助が弟を殺した理由について、生徒がKJ法を用いて付箋を分類・整理した例である。

【第3次】喜助が遠島に送られることについて考える。(第5時、第6時)

〔第5時〕

「弟を殺したにもかかわらず喜助がなぜ晴れやかな顔をしていられるのか」という問いに対し、自分の考えを付箋に書かせた。

グループになって互いが書いた付箋を発表し合い、それらを整理していく学習場面では、生徒が付箋を使う学習に慣れてきたこともあり、今回はフィッシュボーン法で分類・整理させた(図2)。「付箋は『中骨』のそばに貼る」「二番手以降の発表者は、分類を意識して、同じ『中骨』に貼るか別の『中骨』に貼るかを考えて発表する」「タイトルは『中骨』の端の部分に書く」という点に留意させた。実際の活動は非常にスムーズに進んだ。

最後に、自分たちのグループで出てきた付箋の内容と、それを分類したタイトルについて、グループごとに発表させた。

〔第6時〕

「喜助が遠島に送られること」と「島へ送られる喜助の気持ち」について、自分の考えを文章にまとめさせた。

以下に挙げるのは、生徒が書いた文章の例である。「喜助が遠島に送られること」についてはほとんどの生徒が喜助の行動に理解を示しつつも(実線)、「当然」と考えていた。また、「島へ送られる喜助の気持ち」については、「弟を殺した」という事実のみ注目するのではなく、「額は晴れやか」「いかにも楽しそう」などの表現にも着目して考えをまとめている生徒が多かった(二重線)。

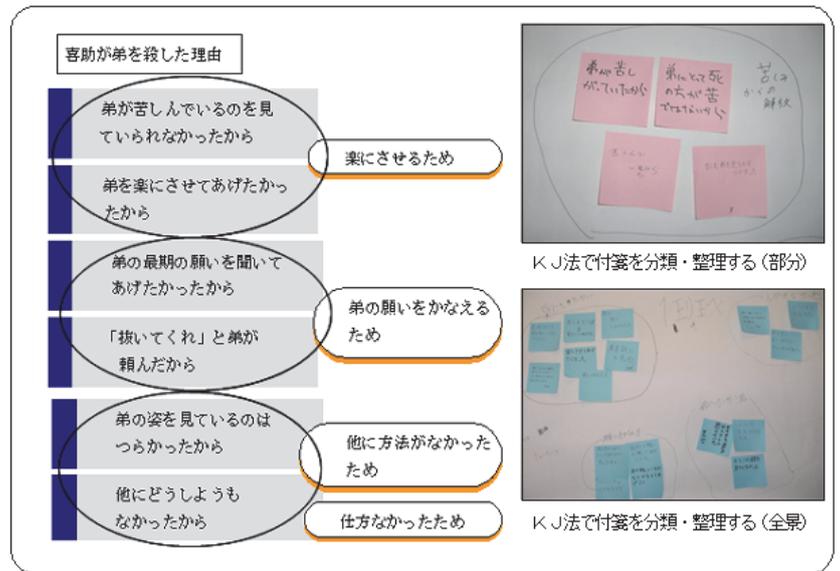


図1 KJ法で付箋を分類・整理した例



図2 フィッシュボーン法で付箋を分類・整理した例

【「喜助が遠島に送られること」について生徒が書いた文章の例】

- ・弟のことを思っていることだとしても、致命傷を与え、死に追いやったのは喜助である。それは事実。よってこれはりっぱな殺人である。遠島に送られるのも仕方ない。
- ・人を殺したという点では有罪になると思う。だが、弟は自分を殺してくれと喜助に頼み、喜助は弟のその願いを実行したのであった。弟を苦しみから救い解放したという点で、少し罪が軽くなってもよいのではないかと思う。

【「島へ送られる喜助の気持ち」について生徒が書いた文章の例】

- ・罪は罪として受け入れ、最後に弟の願いを叶えられたので良かったと思っている。
- ・気持ちを切り替えて、弟の分まで生きようと前向きになっている。
- ・遠島では自分の居場所があり、所得もある。今の生活よりはとても良いものになるはずなので、ありがたく思っている。また、自分の罪を償うことができるため、快い気持ちである。

成果と課題

◇ 成果

生徒は、読みを他者と交流することを通して自身の考えを形成し、表現することができた。特に、思考ツールを活用して交流させたことで、生徒各自は、個人の考えに閉じることなく、より高次の思考に導かれたものとする。

◇ 課題 ～思考ツールをより効果的に用いるために～

思考ツールがもつ特徴を理解した上で、生徒の実態や学習のねらいに合わせて、ツールを選択する必要がある。

事例2 『源氏物語』を教材としたアクティブ・ラーニング型の授業例 ～ジグソー学習^(注3)の手法を取り入れた授業展開～

事例の概要(2年生を対象に実施)

◇ 教材 物語『源氏物語』より「光源氏誕生」(古典B)

◇ 単元の目標

- ・ 古典を読んで、人間、社会、自然などに対する思想や感情を的確にとらえ、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにしようとする。(関心・意欲・態度)
- ・ 古典を読んで、人間、社会、自然などに対する思想や感情を的確にとらえ、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにする。(読む能力)
- ・ 古典に用いられている語句の意味、用法及び文の構造を理解する。(知識・理解)

◇ 取り入れる言語活動

資料から読み取ったことや資料について調べたことを伝え合い、議論することを通して課題について考察する。

思考力を育成するための工夫

事例2では、思考力を育成するための工夫として、生徒がものの見方、感じ方、考え方を広げたり深めたりしていける学習場面を設定した。

具体的には、生徒各自が「エキスパート学習」で学んできた内容をジグソー班で伝え合い、それを踏まえて、課題に対して個人で考察することを求めた。交流を通して自身の見方を豊かにし、そこからより高次な思考を形成させていくために、インフォメーションギャップを利用して生徒同士の考えを交流させる仕掛けとして、また、より高次な思考を形成していくのに役立つ知識を学習させる仕掛けとして、ジグソー学習の手法を取り入れている。

(注3) ジグソー学習

ある話題について知識を学び、他者にその知識を教えるという流れで行う協同学習。

【ジグソー学習の実施例(知識構成型ジグソー法)】

- ①ある課題について個人で考える。
- ②その課題を考えるための知識を分担して学ぶ(「エキスパート学習」)。
- ③エキスパート学習で学んだことを教え合い、それらを統合して、課題に対する理解を構築したり(「ジグソー学習」)、課題に対する理解を公表し合って検討し、自身の理解を再構築したりする(クロストーク)。

授業の様子

【第1次】源氏物語の概要を捉える。(第1時)

前単元で学習した『更級日記』に登場した「少女」が、『源氏物語』に対する憧れの気持ちを抱いていたことを思い出させながら、国語便覧を使い、『源氏物語』のあらすじや時代背景について説明した。

【第2次】本文の内容を把握する。(第2時～第5時)

主語を補いながら現代語訳を考えさせることを通して、本文の内容を把握させた。また、「一の皇子(弘徽殿の女御の子(朱雀帝))」と「玉の男皇子(光の君)」それぞれに対する帝の想いを比較させ、皇子達それぞれの後ろ盾を含めた人物関係も把握できるように配慮しながら読解を進めた。

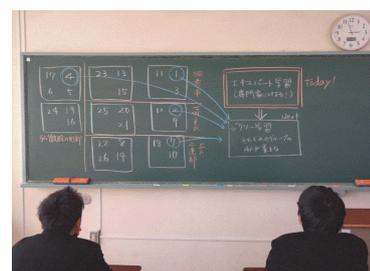
【第3次】「桐壺の更衣を死に追い詰めたのは誰か」について考察する。【ジグソー学習】(第6時、第7時)

[第6時]

まず、「桐壺の更衣を死に追い詰めた一番の原因となったのは誰か」という問いを示し、自分の考えを記入させた。次に、「エキスパート学習」を行った。



問いに対し、自分の考えをまとめる



ジグソー学習の流れを示し、生徒に学習の見通しをもたせる

◇ 「エキスパート学習」〔第6時〕

A	A	B	B
A	A	B	B
C	C	D	D
C	C	D	D



生徒を、帝担当グループ (A)、弘徽殿の女御担当グループ (B)、女御・更衣たち担当グループ (C)、上達部・上人担当グループ (D) の四種のエキスパート班に分け、各グループごとに、それぞれの人物が桐壺の更衣のことをどのように思っていたのかが分かる資料(『源氏物語』や『長恨歌』の一部)を、本文と現代語訳を併記した形で配付した。それらの資料を読ませた上で、以下のことを考えさせた。また、更に詳しく調べたい場合には、タブレット端末、日本史や世界史の資料集を使って調べさせた。

- 自分たちが担当する人物は、桐壺の更衣のことをどう思っていたのか。
- 自分たちが担当する人物は、桐壺の更衣に対してどのようなことをしたのか。

◇ 「ジグソー学習」〔第7時〕

A	B	A	B
C	D	C	D
A	B	A	B
C	D	C	D

「エキスパート学習」でそれぞれ違う人物を担当した4人でグループ(ジグソー班)を組み直した。まず、「エキスパート学習」で学んできた内容をもとに、自分が担当した人物が桐壺の更衣のことをどう思っていたのか、また、桐壺の更衣に対してどのようなことをしたのかを伝え合わせた。そして、それぞれが伝え合った内容を加味した上で、以下のことについて議論させた。

- 桐壺の更衣を死に追い詰めた一番の原因となったのは誰か。
- 「帝」「弘徽殿の女御」「女御・更衣たち」「上達部・上人」それぞれに弁解の余地はあるか。

その後、各グループごとに、自分たちが議論した内容を発表させ、クラスでクロストークを行った。四者の弁解の余地については、次のような意見が出た。

帝は宮中での権力関係にうんざりしていたのではないが、宮中での生活に閉塞感を感じていたことも考えられる。だから、愛する女性を得て歯止めがきかなくなってしまったのではないか。(帝の弁解の余地)

右大臣家に生まれ育ち、高いプライドがあるだけに、自分より格下の桐壺の更衣に帝の寵愛を奪われたことが許せなかったのだろう。(弘徽殿の女御の弁解の余地)



桐壺の更衣が自分よりも身分が低いから、あるいは自分と同じくらいの身分だからこそ、その更衣に帝の寵愛を独占されたことが悔しかったのではないか。(女御・更衣達の弁解の余地)

一人の女性に入れ込んで政治を怠る帝に対し、しっかりして欲しいと思うのは、役人として当然なのではないか。また、中国でのように世が乱れるのも困る。だから、帝や桐壺の更衣に対して冷ややかな態度をとってしまうのは、仕方なかったと思う。(上達部・上人の弁解の余地)

クロストークの後、「桐壺の更衣を死に追い詰めた一番の原因は誰か」という問いを個人で再考させた。以下に挙げるのは、ある生徒が書いた考察の例である。他者の意見を取り入れながら(二重線)、自分のエキスパート学習での成果(実線)を踏まえて考察を深めることができていることが分かる。

帝の桐壺の更衣への過度な寵愛が原因で、他の女性たちからのいじめが起こるようになったのだが、やはり愛というのは仕方がない。しかし、それが死に追い詰めたとは言い難い。やはり、そのいじめのリーダー格である弘徽殿の女御が死に追い詰めた一番の人物であると考えられる。

成果と課題

◇ 成果

生徒は、思考を深めるのに役立つ知識を伝え合い、それを踏まえて、各自で課題について考察することができた。特に、「問い」に対する自身の見方を形成するのに役立つ知識を学習させた上で、クロストークを通じて互いの見方を交流させたことは、より多角的な視点からの考察を実現させる上で効果があったものとする。

◇ 課題 ～ジグソー学習をより効果的に行うために～

ジグソー学習をより効果的に行うには、エキスパート班で探究する学習の結果が、ジグソー班で探究する課題の解決につながるものとなるように設定することが求められる。

事例3 『食と想像力』『思い込みの危険性』の発展学習における、アクティブ・ラーニング型の授業例 ～「思考のすべ」を用いた話し合いの学習～

事例の概要(3年生を対象に実施)

◇ 教材 随想『食と想像力』、評論『思い込みの危険性』（現代文B）

◇ 単元の目標

- ・文章から読み取った視点を切り口として世の中の問題について話し合うことを通して、社会についての自分の考えを深めたり発展させたりしようとする。(関心・意欲・態度)
- ・文章から読み取った視点を切り口として世の中の問題について話し合うことを通して、社会についての自分の考えを深めたり発展させたりする。(話す能力・聞く能力)

◇ 取り入れる言語活動

世の中の問題について話し合うことを通して、問題の解決策を考える。

◇ 本実践について

現代文Bの授業において、高等学校での3年間の国語の集大成として、総合的な言語能力の育成を目指した大単元を実施した。具体的には、二つの教材（随想『食と想像力』、評論『思い込みの危険性』）で学んだ後に、その発展学習として、それらの文章で示された「想像力の欠如」「思い込みの強さ」という視点を基に、現代社会で生じている問題とその解決策について生徒に考察させる話し合いの学習を行った。この大単元の中の発展学習として行った部分を事例3として取り上げる。

思考力を育成するための工夫

事例3では、思考力を育成するための工夫として、生徒がものの見方、感じ方、考え方を広げたり深めたりしていく学習を取り入れている。

具体的には、世の中の問題を見つけ出し、それについて話し合うことを通して、問題の解決策を考えることを求めた。自身の見方を豊かにし、問題の本質に迫る深い思考を実現させていくために、生徒に思考させる学習場面においては、生徒の思考を促す仕掛けとして、「比較」「分類」「理由付け」等の「思考のすべ」を、第1次～第4次の発問に取り入れている。



授業の様子

【第1次】世の中の「問題」を見つけ出し、その「問題」の特徴についてグループで話し合う。(第1時、第2時)

世の中の問題の多くが「想像力の欠如」や「思い込みの強さ」によって起きているのではないかという仮説を提示した後に、この発展学習において追求する課題を以下のように示した。

どういう「問題」が「想像力の欠如」を原因として起きており、どういう「問題」が「思い込みの強さ」を原因として起きているのかを分類し、それらの「問題」の共通点を見いだすことで、解決の糸口が見えるのではないか。自分たちで「問題」の解決策を考えてみよう。

そして、以下の①、②のように発問し、グループで話し合いをさせた。

①自分たちの身の回りで起きている「問題」を複数挙げてみよう。

②自分たちが挙げた「問題」を、その原因が「想像力の欠如」にあると思われるものをA、「思い込みの強さ」にあると思われるものをBとして、AとBに分類してみよう。【分類する】

【第2次】第2時に自分たちが行った分類について、その理由をグループで話し合う。(第3時)

以下のように発問し、前時に自分たちが行った分類について、その理由をグループで再確認させた。

その後、各グループの話合いの結果をクラス全体で共有した。右に挙げるのは、各グループが出した「問題」とそのAとBの分類を示したものである。

【1班】
A マララさん（世界には学校に通えない子どもたちがいるという問題）
B えん罪事件

【2班】
A いじめ
B 授業での先生からの質問

【3班】
A いじめ
B 人種差別問題

【4班】
A 環境破壊
B いじめ

【5班】
A 難民受け入れ問題
B 人種差別問題

【6班】
A いじめ
B 体罰による事件

その「問題」をなぜA（B）と分類したのか。理由を説明できるようにしてみよう。【分類し、理由付けする】

【第3次】第3時に各グループから挙げられた「問題」をどう分類するかについて、クラスで話し合う。(第4時)

以下のように発問し、前時に各グループから挙げられた「問題」をどう分類するかについて、改めてクラスで話し合った。話合いにおいては、まず、各「問題」をAとBのどちらに分類するかについて生徒に挙手をさせ、全員が一致した場合には、その「問題」は挙手の結果のとおりで決定とした。一方、挙手の結果が割れた「問題」については、それをどう分類するかについて、教師による司会のもとで、クラスで議論させた。

前時に各グループから挙げられた「問題」が、「想像力の欠如」(=A)と「思い込みの強さ」(=B)のどちらが原因で起きているのかについて議論してみよう。【分類し、理由付けする】

【第4次】第4時に分類したAとBそれぞれの「問題」の共通点と相違点について話し合う。(第5時、第6時)

前時に分類したAとBそれぞれの「問題」の共通点と相違点について、まずはグループで、そして最後はクラス全体で話し合った。生徒の話合いの様子を見ながら、以下の①、②、③のように発問していった。

①前時に分類したAとBそれぞれの「問題」の共通点と相違点についてグループで考えてみよう。【比較する】

②そもそもこれらの「問題」は、「想像力の欠如」や「思い込みの強さ」を原因として出てきた問題なのだから、ここで発想を変え、僕らは「どういう時(どのような問題に直面した時)」に想像力が働きにくくなるのか、また「どういう時(どのような問題に直面した時)」に思い込みが強くなってしまふのかという視点から両者を比較し、共通点と相違点を探ってみよう。【比較の視点を意識する】

③比較する場合には同じ視点で比べることがポイントである。「問題の対象(被害者)は誰なのか」「その問題は世界で起きていることなのか」「その問題は日本特有の事例なのか」など、同じ視点から比較してみよう。

【比較のポイントを把握する】

【第5次】「想像力の欠如」や「思い込みの強さ」によって引き起こされる「問題」の解決策を考える。(第7時)

「想像力の欠如」や「思い込みの強さ」によって引き起こされる「問題」の解決策を生徒各自に考えさせ、スピーチさせた。「自分の見識を広げていくこと」や「他者に対する豊かな想像力をもつこと」について述べた生徒が多く見られた。

成果と課題

◇ 成果

社会で起きている「問題」が、どのようなことが原因で生じているのか、また、今後このような「問題」に自分がどのように向き合っていくかについて、生徒は自分の考えをまとめることができた。特に、「比較」「分類」「理由付け」といった視点から発問したことは、生徒の思考を促したり掘り下げたりしていく上で効果があったものとする。

◇ 課題 ～「思考のすべ」をより効果的に活用するために～

「思考のすべ」は、授業での発問に用いることも有効であるが、この事例3のように、各次で扱う学習課題自体に組み入れると、生徒各自が学習における思考の進め方を明確に把握できることから、個人の学びが充実し、ひいては教室集団の学びも充実していくことが期待できる。

これからの「思考力」の方向性

育成すべき資質・能力

◇「キー・コンピテンシー」 「21世紀型スキル」

いま、様々な国や機関で「育成すべき資質・能力」を踏まえた教育の在り方についての研究が進められています。「育成すべき資質・能力」としては、例えば、OECDの「キー・コンピテンシー」やATC21sの「21世紀型スキル」などが広く知られています。

◇「21世紀型能力」

日本の国立教育政策研究所も日本型モデルとして「21世紀型能力」を提唱しています。これは、「思考力」を中核として、それを支える「基礎力」と思考の方向性を決定する「実践力」を重層的に育むというものです。（図1）

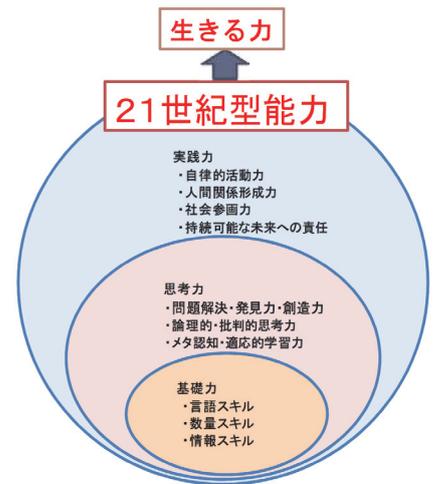


図1 21世紀型能力
(国立教育政策研究所のWebページより)

次期学習指導要領の方向性と思考力

現在、中央教育審議会において次の学習指導要領改訂に向けた議論が進められています。その中では、学力の三要素等を踏まえ、「何を知っているか・何ができるか」という知識・技能の習得と、それらを「どう使うか」という思考力・判断力・表現力等の育成、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」という主体性・多様性・協働性、学びに向かう力、人間性などをバランスよく育むことを重視しています。（図2）

これらは、現行の学習指導要領における考え方と基本的に共通するものですが、教科横断的に育成すべき資質・能力を育むという視点が強調されています。また、これまでの「何を教えるか」という学習内容に加えて、「どのように学ぶか」という学習方法についても盛り込まれる見込みであり、特に、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）の視点から授業を見直すことが求められます。高大接続に関する議論の中でも高等学校における教育の質的転換を求めており、これまで以上に思考力・判断力・表現力等の育成を進めていく必要があります。

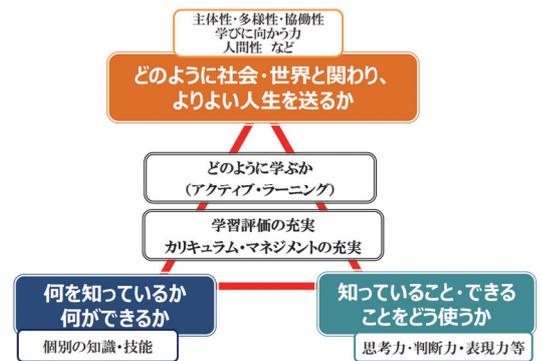


図2 育成すべき資質・能力の三つの柱を踏まえた日本版カリキュラム・デザインのための概念
(文部科学省Webページより)

栃木県総合教育センター（研究調査部）

〒320-0002

栃木県宇都宮市瓦谷町1070

電話：(028) 665-7204

FAX：(028) 665-7303

本事例についての詳細は、本調査研究のWebサイトを御覧ください。

栃木県総合教育センター |

調査研究・報告 | 教育課題に関する調査研究 | 平成27年度調査研究 高等学校における教科指導の充実
http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/cyosa/cyosakenkyu/kyokasido_h27/index.htm